Kanazawa University

金沢大学文学部論集　言語・文学篇
第25号　2005年　1～24

中国語命令表現内における文法構造の役割分担（その１）

―日本語の動詞一語文と比較した場合―

大　瀧　幸　子

1. はじめに

中国語には動詞と形容詞によって構成される文法構造が３種類ある。[1]

Ⅰ．結果補語構造＝　動詞＋性質形容詞

Ⅱ．様態補語構造＝　動詞＋構造助詞“de 得”＋状態形容詞

Ⅲ．連用修飾構造＝　状態Ａ＋構造助詞“de 地”＋Ｖ＋（～補充形式）

中国語の形容詞には文法機能の異なる２種類の形式「性質形容詞」と「状態形容詞」とがある。性質形容詞は原則として単音節（Ａ）または二音節（ＡＢ）で、その重畳形式はＡＡ、またはＡＢＡＢとなるが、その重畳形式の文法機能は状態形容詞のものへと変化する。状態形容詞は原則として（ａ）否定副詞と統合できない（ｂ）程度副詞と統合できない（ｃ）言い切るためにも連体修飾語となるためにも構造助詞“de 的”を必要とする。また状態形容詞が二音節ＡＢで構成されている場合、その重畳形式は動詞のそれと同一のＡＢＡＢとなる。[2]

本稿はこの３種類の文法構造が単文の述語として命令表現（日本語動詞一語文と同様の現象素（後述）を基準にする）として用いられた場合、それぞれの統合意義特徴（文法構造としての「２つの単語グループ（原則として品詞に相当。意味上の語彙群[3]の場合もある。）」を統合した、その配列そのものが表す意味）が、命令表現としてどのような役割を担うかを、その用法の相補分布のあり方を検討することによって分析し考察する。また、相補分布のあり方から統合意義特徴そのものについても再検討を加えることとする。

1.1　３種類の文法構造の統合意義特徴

筆者が統合意義特徴を記述してきたⅠ、Ⅱ、Ⅲの文法構造のうち、命令表現として用いられる文型（主語（動作主・動作対象）指定なし）の統合意義特徴は以下のとおりである[4]。なお、感覚感情形容詞との統合は典型的命令表現にそぐわないと同時に、ほかの形容詞群とは異なる統合意義特徴が生じるため、本稿では考察対象から除外する。

Ⅰ：結果補語構造（以下、統合型内における動詞をＶ，形容詞をＡと略記する。）

ＶＡ（了）型はつねに述語動詞が表す動作行為の行われる、ある不定時点において、第一人称者（注：統合型を選択し、かつ述語が要求する格を補填して叙述の営みを行う人

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

格）が設定している＜ベクトル量判断のスケール＞（注：計量形容詞[5]を含む性質形容詞が意義素内に有する判断基準）を用いて、動詞が表す出来事（注：行為の表現水準[6]「事柄，出来事，事実，現実」の内の一つ）が、動作行為とその当然の帰結として慣習的に認められる「格要素」（動作主・動作対象・道具・スペースなど）の状態変化を表現する。

Ⅱ：様態補語構造

“Ｖ得”は表現水準・事柄を表し、動詞の意義素内で「弁別的機能を果たす意義特徴」のみを表現する。したがって意義特徴は本来出来事の流れを追って認定されるものであるが、“Ｖ得”における意義特徴の構成は時間的展開をしめさない[7]ゆえに、“得”を伴わない単独の無限動詞がその定義内容である「動作にゴールが設定されていないこと（例えば動作の継続が長時間にわたること）」を表すことができない。

Ⅲ：連用修飾語構造

第一人称者が「その動作を行う動作主が動作を行うにあたってたてた動作の流相または異相に対するプラン」を、「連用修飾語を用いて表現する」構造である。ただし、その動作行為は一度最後まで到達したもの（表現水準・事実）として、認定されている。

連用修飾語が、評価副詞“很”と性質形容詞の二項で構成されている場合[8]、性質形容詞の要求する格（判断対象格）は「動作主が異相で到達すべき状態として目的意識を抱いている状態」を内容とするが、言語形式化されていないことになる。また、形容詞重畳形が連用修飾語として用いられる場合、その要求する格（描写対象格）は「動作主が積極的な意志をもって果たそうとしている流相での動作のやり方」を内容とするが、やはり言語形式化されていない。

さて、以上の筆者の調査分析によって明らかになった、統合意義特徴に由来する三種類の統合型の用いられ方の違いのうち、命令表現と関わりがあるのは以下のとおりである。

（１）動詞と形容詞との結びつきの自由度は、強から弱へ向けて、Ⅱ→Ⅰ→Ⅲの順である。すなわち、ＶＡ了型内での結びつきが最も制限されているゆえに、通常、ＶＡ了型で使われる組み合わせはＶ得型でも“很”Ａ/ＡＡ“地”Ｖ型でも用いることができる。

（２）ⅡとⅠとが逆転する代表例は、「靴が履きなれるうちに大きくなった」のように、自然な経過ではあるが長時間かかり、眼前での判断がしにくい変化の表現である（例えば、“這只靴穿大了”は可、“這只靴穿得很大”は非文）。

（３）動作主の発話内行為としての意志・目的を表現できるのは、Ⅲのみである。[9]

1.2　命令表現を考察対象とするにあたって

本稿の立論は、命令という「発語内行為」の素描から「現象素枠」の範囲の検討へすすみ、現象素枠内の分析から「単語の意義素の総和を超えた統合意義を構成する」統合意義特徴の抽出へとすすむ手順をふむことにする。

本稿は最初に上記の手順では最後の＜単語と統合型の意義特徴＞に関する筆者のこれま

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

での研究結果について述べたが、「発話の実態を観察するなかから段階を踏んだ抽象過程を経て個々の言語形式ごとの意義特徴記述にいたる」という手順は、服部四郎が意義素論を提議した当初から作業仮説としてたてていたことである[10]。ただし、その各抽象段階についての考察を個々に深化させる理論展開および各抽象段階相互の関連付けは、服部自身の論考では完成されないままであり、国広の現象素論の提議と、認知言語学が提議してきた人間の認知能力が言語に反映することを示す諸概念が言語学会で定着するのを待って、はじめて可能になりつつある。また、抽象化という操作の実態については稿を改めて論じる。

1.2-1　発語内行為としての命令

具体的な発話活動のなかに現れる言語形式の意味・文法的機能を抽象化するための第一段階の方策として、まず、特定の言語形式を離れて、「話し手が言葉を発する目的」と、「その予期した効果を得る手段としての発話行為」を一般意味論・言語哲学の立場にたって分析する語用論・発話行為論の立場が挙げられる。

本稿では命令形の意味分析を目的とするため、発話者の立場から発話の目的を重視する点で発話行為論を参考とするが、その効果の獲得についての考察は行わない。即ち「聞き手の解釈のあり方とその反応」を所与事実として扱うことはせず、考察の対象外におくものである。その根拠は近年、急速に発展してきた認知科学の一部門である脳科学が解明した、生命体としての人類に共通する極めて基本的な脳機能のメカニズムの知見にある。現在のところ、筆者が信頼して依拠する脳科学での知見は、次の二つであり、それらを人間に普遍的に共有されている認知能力の一部を解明したものと捉えることにする。

（1）発話行為と理解行為とは、別系統のシステムで行われる。[11]

（2）短期記憶（最近起きたこと、新しいできごとの記憶）と長期記憶（過去に起きたこと、古いできごとの記憶）とは別系統のシステムで行われる。[12]

本稿では、言語習得完了後の「熟達した母語話者が使用する言語」を考察対象にしぼるゆえに、理解のシステムが生み出す発話行為の諸要因については触れない。従って、発話行為論での「話し手の意味（speaker meaning)」のみに考察対象を限定することになる。

しかし、命令という発話行為について以下のヴァンダーヴェーケン 1990[13]の記述は、一般意味論の立場から個別言語の命令表現を分析するにあたって考慮すべき基本的要件を挙げていると考えられる。

『基本的発話行為を遂行する際に、話し手は、言葉と発話が行われている世界の間の合致の方向を決定するために、常にある一定のやり方で、命題内容を世界へ関係づけようとする。その発話の成功条件と充足条件を定式化するにあたり、まず発語内効力を六つの構成要素（発語内目的・発語内目的の達成の様式・命題内容条件・予備条件・誠実条件・強さの度合い）に分割する。そのうち、発語内目的は発語内効力の最も重要な構成要素である。というのは、発語内目的はその発語内効力をもつ発話行為の「命題内容と、その世界

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

において一般には独立して存在する事態の有様（p103）との合致の方向」を決定するからである。発語内目的は５種類しか存在しない。

（１）言明（２）行為拘束＝これから一連の行動に話し手みずからを拘束する（３）行為指示＝聞き手に何がしかの事をさせようと企てる（４）宣言（５）感情表現。

発語内行為が充足されることはすなわち、(１)では言葉から世界へ向けての合致、(２)（３）では世界から言葉へ向けての合致、（４）では二重の合致の方向、（５）ではゼロまたは空の合致への企てが達成されることである。』

（翻訳書 pp102-105 の要略：筆者の言葉で言い換えるならば、（２）（３）では世界を言葉に合わさせようとする企て（命令祈願提案など）が発語に含まれる。）

ヴァンダーヴェーケンが発後内目的２（≒意志表示）と３（≒命令）について「同一の合致の方向を有する」と指摘していることは、命令表現の言語形式が意志・義務表現の言語形式によって代行されるメカニズムへの的確な解釈原理を示しているといえる。また、一般意味論の立場での命令の定義は、「各自然言語のコンテクスト内に共通する文脈意味」としての命令分析を行おうとする場合にも、基本的定義を提供していると評価できる。

1.2-2　現象素と現象素枠

現象素という名称および定義は国広哲弥 1994 年 11 月「認知的多義論－現象素の提唱」（『言語研究』pp22-43，日本言語学会）で初めて提唱された。同種の概念は認知言語学における各種スキーマーにみられるが、現象素の提案理由は上記発話行為論における「(話し手が命題を近づけようと企てるところの）その世界において、一般には独立して存在する事態の有様」を、言語形式の意味分析を行う際に考察対象とするべきだという主張を骨子とする。

この国広論文では、ある一つの語形には一つの意義素しかあり得ないのではなく、「ある同一の現象に基づく認知的多義が認められるならば意義素はふたつ以上になり得る。この同一の現象のことを「現象素」(phenomeneme）と呼ぼう。」とされている。分析の具体例の一つとして、認知意味論の立場でなされた“take”の多義のもとになる意味[14]と国広による“取る”の多義の記述方法とを比較している。国広による現象素の記述方法は、「離脱，把握，獲得，目標（＝移動先)」という４つの「認知焦点」で構成され、それぞれは「時間的な前後関係を示しているのではなく、実際の動作では「離脱」は同時に「獲得」である。」とされる。“take”では「離脱」が焦点化されるよりは「獲得」が焦点とされ、“取る”では目標が焦点化されることがない、すなわち「現象素が目標まで伸ばされていない」としている。(PP30-32) 本稿ではこの「言語形式によって想起される現象素の範囲」を「現象素域」と呼ぶことにする。

さて、本稿では、国広が提唱した現象素の基本概念を、同一言語内の同一言語形式の多義の解明と、複数言語の単語レベルでの意味の比較対照を行う基準としてだけではなく、

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

構文の比較対照を行うのに用いうる基準として拡大解釈して用いることにしたい。

現象素の設定が、複数の自然言語の対比研究に明確な基準を与える可能性をもつことは国広自身もこう指摘している。『従来の対照的意味論では、まず個々の言語の中での意味分析をし、その結果を比べるという方法をとった。(中略) 筆者などは、対照に際しては両言語に共通の枠組みを考えるべきだと唱えながらも、概念的意味から出発していたためにうまく行かなかった。ここで論じる認知的接近法はその壁の突破口になるのではないかと考えられる。(P30)』

しかし、現象素が提案された段階では構文の意味をどのように組み込むかについての提案がまだなされていない。そこで本稿は、統合型が単語二つ以上で構成されることを鑑み、統合型に「現象素枠」を対応させることとし、その定義及び表記原則を次のように定める。

まず、本稿では言語形式と現象素との結びつきについて、「指示」「表示」「象徴」などの記号論での概念をもちいずに、「慣習的想起 (conventional association)」の関係として規定する。したがって、本稿においては現象素を次のように定義する。

「言語形式が慣習的に想起させる言語外表象として存在する、モノ或いはコトガラ」

次に本稿は、複数以上の単語、複数以上の (直接構成要素分析では「重層した」) 統合型によって慣習的に想起される言語外表象 (認知言語学では大小問わずにスコープとして一括されている) を「現象素枠 (域)」として区別する[15]。また、言語外に実存する現象 (「実存現象」として区別する) と現象素 (枠) 域との差異は、例えば、『青い色をした花』という実存現象を目にしたときに、「あおい花」と「花があおい」というどちらの表現を選択するかという過程が、そのどちらの表現へ還元していく (想起する、の反対方向を「還元する」と名づける) 現象素枠を通して実存現象が認定されるかという過程に他ならないものとして説明する。

上記のごとく仮定のもとで言語形式がどのような現象素 (枠) を想起するか、命令表現と関係の深い動詞を例にとりあげる。

(1) 動詞の単一現象素内では語義としてのアクションツアルトが想起されている。

(2) 動詞と特定の名詞が統合された場合は、アクションツァルト内に動詞の要求する格または格的要素を補填するモノが想起されている。

また本稿では、統合型を構成する二つの言語形式が想起するひとつの現象素枠 (域) における、現象素 (枠) どうしの包摂関係について、「ズームイン」「ズームアウト」という関係が成立するものと仮定する。この関係は抽象化の捜査に関わるものであり、稿を改めて論じることにする。簡略に原則のみを述べるならば、「ズームイン」は現象素枠域を狭めて局部に新たな情報を付け加えていく操作であり、「ズームアウト」は現象素枠域を広げて背景 (主に時空) を付け加えていく操作である。

【最小統合型 (各項が一自立語 (付属語付き含む) で構成される) の現象素枠表記原則】

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

統合型のなかで表現される自立語のどちらが焦点となりうる情報を想起するかをマークする。焦点となる情報はもう一方の情報をその内部に包含するものとし、非焦点情報にとって焦点情報はズームイン先となり、非焦点情報はその現象素域へズームインしていくものとする。」（視点の所有者は「第一人称者」[16]）

【統合型の現象素枠重層原則Ⅰ】

統合型内の二項が現象素枠域の情報を局部的に想起する方法は統合型によって異なる。しかし統合型が重層して文を構成していく場合、下層にある統合型とその上層にある統合型の現象素枠との関係は、原則として＜時空への視点を加えつつズームアウトしていく背景化される情報＞とそれ以前の＜ズームアウトされていく前景情報＞である。

【統合型の現象素枠重層原則Ⅱ】

統合型によっては、ある現象素をもう一方の項の言語形式の現象素にズームインさせてようとする場合に、ズームイン先の情報が言語形式によって表されていないことがある。例えば連用修飾構造では、被修飾成分となる認知焦点（動作の様態＝流相の状況、など）に関する情報は、動詞と異なる別個の言語形式としては表現されていない。

上記の三原則は、形容詞命令表現を分析するにあたり、その有効性を確認することにする。

1.2-3 意義素と意義特徴

「意義素は意義特徴の束として記述される」というテーゼのもとに単語の意味分析が始められたときに、意義特徴として記述すべき特徴は弁別的なものであるべきか、示差的なものであるべきかという議論があった。[17]本稿では前者を「当該単語の意味を当該単語の意味たらしめる典型的意義特徴であり、否定表現によって否定の焦点とされる特徴」と理解し、後者を「一つの自然言語における語彙体系内で、当該単語とほかの単語を区別しうる特徴」と理解することにする。しかしながら、その言語を使いこなす言語運用能力を養成するために必要十分な意義素記述としては、弁別的機能を果たす意義特徴（「弁別的意義特徴」と略称。既出）だけでは抽象的過ぎる情報の記述にとどまり、示差的機能を果たす意義特徴（「示差的意義特徴」と略称。）の記述は類義語グループとしてなにを設定するかによって情報が変化するという不安定な記述になる。本稿では意義素記述にあたって、弁別的意義特徴、示差的意義特徴を「必要十分」[18]にとりあげるように留意する。

2.「日本語動詞の命令形」が想起する現象素について

日本語では所謂「一語文」による命令表現が存在する。また、おそらくほとんどの自然言語で最もシンプルな言語形式で伝達を完了できる発語内目的は「命令」であろう。そこで、上記１項の手順に従って意味分析を行うにあたり、筆者は命令表現の考察から始める。

日本語を母語とする筆者には、発話場面のなかの無限に近い情報から母語話者の感覚によって慣習的意味を取り出すことが比較的容易であるので、まず、日本語での言語形式とその意味から慣習的に想起される現象素を記述する。そして、的確に「発話場面内に内在

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

する慣習的意味[19]」が把握できたものとして、中国語ではどの言語形式がその現象素（枠）を想起させられるかを検討していく。

2.1-1　日本語の命令表現

日本語動詞の命令形は、動詞群によって「命令表現」または「祈願表現」のどちらかになる。本稿では、両者の間の示差的意義特徴を「コントロール可能・不可能」と記述する。

【表１】行動動詞（コントール可能動作）の命令形が表す現象素

話し手＝Ｓ，聞き手＝Ｈ，モノ＝Ｔ，（　）＝予備条件，＜＞＝発話内目的

＜命令の現象素（枠）＞認知焦点のチェーン[20]	日本語表現	中国語表現
（X）Ｓ→：Ｈ＜動作開始＞	来い！（来て！）	来！来来！来一下！
	歩け！（歩いて！）	走！　走走！
	読め！（読んで！）	看！看看！念！念念！
（Y）Ｓ→：Ｈ（移動開始）→→→　＜継続＞	歩け歩け！	走，走！
Ｓ→：Ｈ（移動継続）→→→　＜終了＞	止まれ！	站住！（状態描写）
Ｓ→：Ｈ（動作継続）→→→　＜終了＞	止めろ！	别干了！（代動詞否定）
（Z）Ｓ→：Ｈ＜動作開始＞＝Ｔ＜変化開始＞	燃やせ！	生火！　烧火！（烹调）
	落とせ！	扔下（来/去）!
Ｓ→：Ｈ→Ｔ（動作・変化開始）→＜継続＞	燃やせ燃やせ！	添火！烧旺点儿！ 烧得（更）旺点！
Ｓ→：Ｈ＜動作開始＞＝Ｔ＜状態・終了＞	消せ！（燃焼中の火） （スイッチ）	灭火！　救火！（消防） 关掉！　关上！
Ｓ→：Ｈ（動作継続）→Ｔ＜状態・終了＞	消せ消せ！（火のみ）	别烧了！

【表１】のなかの言語形式上の対応関係は以下のような知見として整理できる。

（X）動作の開始を促すための表現では、日本語中国語相互に形式的な対応関係がある。

X-1；素っ気無い「生（キ）の表現」では、ともに動詞一語を使う。

X-2；対人関係への配慮を加えたもっともシンプルな「気遣いの表現」としては、日本語「連用活用形の言い差し」と中国語「重畳形」が対応関係にある。特に中国語では動詞一語で命令を表す表現を好まない。

（Y）動作がすでに開始されたあとに、その動作に変更を加えさせる表現には、２種類（Y-1）（Y-2）の対応関係が認められる。

Y-1；動作そのものの勢いをさせ増強させようとする表現では、日本語と中国語とで、重畳形のなかにポーズが含まれない・含まれるという対応関係が認められる。中国語では重畳形というより「連呼」の形式と呼ぶことにする。

Y-2；動作の勢いを弱化させようとする表現としては、日本語では増強の表現に用いられる動詞と反義語関係にある動詞（場合によってその重畳形）を使うという語彙の変更

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

を行う。

中国語でも日本語と同様に動詞の語彙変更を行う。そのほかに、動作の影響・程度が弱化したあとに生じる新たな状態すなわち「動詞が表すアクションツァルト[21]内の過程に慣習によって成立すると認められている範囲の状態」をメタファー（または本義に対する派生義）によって表すために選択される方向動詞（“上”“下”“住”“掉”など）で構成される方向補語構造を用いる。それらの原則として、＜移動、付着、分離＞という空間ポジションのメタファーを表す。

また、日本語には動作打ち切りを表現する代動詞（「やめる」）があるが、中国語には存在しない。肯定の代動詞（“干”“做”etc）の否定命令形（“别”）と語気助詞“了”の呼応形式を用いて、さまざまな動作の打ち切りを表現する。

（Z）動作が行われることによって必然的にその動作に関連するモノに変化が生じるという、動作とモノの状態の間に因果関係が存在する場合、その状態の成立を促す表現には２種類（Z-1）（Z-2）、それまでの状態を弱化させる表現では１種類のみ（Z-3）の対応関係が認められる。

Z-1；日本語では他動詞（「燃える／消える」に対する「燃やす／消す」）を使う。

中国語では原則として動詞賓語構造を使う。この場合の賓語は虚目的語[22]であり、生じる状態と意味的関連が近いモノ（この場合は「火」：動詞の生産物格（通称「結果格」））を充填する名詞が選ばれる。また、支配されるモノと生じてくる状態が同じ（賓語としても同一単語（例えば“火”）であっても、現象素の場面背景（例えば、火事、炊事）によって選択される動詞語彙が異なる。すなわち、場面背景が認知焦点にとりあげられている。

Z-2；すでに持続してきたモノの状態を強化させる表現では、日本語は重畳形を使う。

中国語では通常、動詞の結果補語として形容詞命令形＜形容詞＋一点＞を用いる。より強調する修辞表現としては動詞の様態補語として形容詞命令形も用いる。

Z-3；それまで持続してきたモノの状態を弱化させる表現では、日本語も中国語も、Y-2と同様の表現方法を使う。ただし、中国語における動詞語彙の変更は動詞賓語構造内で行われる。

2.1-2　中国語のⅠ結果補語構造とⅡ様態補語構造

前項2.1-1の知見から共通してとりだせる、日本語と中国語の命令表現における対応関係の特徴は、つぎのようにまとめられる。

日本語では動詞意義素内のアクションツァルトが想起する現象素内情報で命令表現が発せられる。一方、中国語では、動詞賓語構造、文法構造Ⅰ、Ⅱという統合型が加わった現象素枠内の情報で命令表現が発せられている。動詞の意義素内構造の違いに注目するならば、その想起できる現象素の範囲（現象素域）が異なっている。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

すなわち、具体的に記述するならば、日本語では「開始してから一定の方向へ向けて進行していく出来事の経過」に対して、その経過の出発点か、終了点かのどちらか一方を焦点として言語形式化することで（発語内）命令行為を行っている。かつ、動詞命令形を用いれば動詞の意義内アクションツァルト全過程を展開せよと要求できる。

一方、中国語ではアクションツァルト内の過程のどの段階に焦点をあてて（発語内）命令行為を行うか、によって、動詞一つではなく、動詞と形容詞の双方による現象素枠として想起する必要がある。

そこでさらに、筆者のこれまでの文法構造Ⅰ、Ⅱの統合意義特徴の分析に基づいて考察を進めるならば、中国語では異なった統合型を用いることによって、動詞の現象素と形容詞の現象素を異なった統合のさせかたをしていることを指摘できる。

（1）　結果補語構造では、「動作が継続して生じる動作対象（モノ）の新たな状態（平相の状態に対する異相の状態）に対する増強」を、動作を始めることと同時に命じている。すなわち、動作開始と異相の成立の双方を別個の言語形式により、かつ同時に表現することによって命令表現を成立させる。すなわち、結果補語構造は動詞と形容詞の二単語が統合されているにもかかわらず、「唯一の出来事過程についての命令」を表現しているのであり、アクションツァルト内に動作と混合して生じる状態（異相での新しい状態）についての命令行為を表現している。また、「ある動作に慣習的に付随する結果（ノーマークの結果：目的とできる好もしい結果）」を認知焦点としてとりあげる表現でもある。

（2）　様態補語構造では、「当該動詞が想起する行為がすでに行われていること」を発語内予備条件とした場合に限り用いられる。そのうえで「新たに行われるべき動作が、すでに行われた行為によって生じた（異相の）状態を具体的基準（多くは時間的により早く成立した状態、または空間的に隣接して存在している状態）よりも強化すること」という二重の事柄を、別個の言語形式により、かつ同時に表現することによって、命令表現を成立させる。すなわち、様態補語構造が動作の開始時には用いられないことからも裏付けられるように、“Ｖ得”が表現する事柄と状態形容詞が描写する状態とを想起する現象素枠内には「唯一の出来事過程とはみなしえない、途切れた時差と因果関係」が存在している、と解釈できる。

2.2-1　日本語の祈願表現

本稿での「祈願表現」は通常の宗教的内容をもつものではなく、話し手の「コントロール不可能の事態に対する望み」[23]を表す表現に限定する。

動作行為のコントロール可能不可能について、日本語では語彙群の区別がみとめられる。すなわち、生物（有意思）の行為を表す他動詞と、無生物（自律）[24]の変化を表す自動詞との並立関係が存在する。意思とは関係のない過程・変化（コントロール不可能）の命令形は、一般的には祈願表現になる。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

燃やす：燃える(→燃えろ)　現す：現れる(→現れろ)　上げる：上がる(→上がれ)
落とす：落ちる(→落ちろ)　汚す：汚れる(→汚れろ)　降らす：降る(→降れ)

これらの出現頻度の高いペアの形式上の並立関係はつぎのように記述できる。

＜同一語幹（子音）＋（a／e，a／u，e／a，o／i，o／e）＋（su／ru，ru）＞
＜同一語幹（母音）＋（su／reru）＞

このように、コントロール不可能な変化過程の表現は日本語においては文法的な違いとして記述できるほどの「形式上の少数の規則性」が「大量の語彙のなかに見出される」とは認めがたく[25]、語彙的な違いとして動詞個々に記述する語義的意味特徴であるとみなしてよいであろう。ただし、認知のありかたとして「自律」を表す語彙群が存在することは、確認できる。さらにまた、精神的な意思行為である「覚える、考える」では命令表現（祈願の意味は場面・文脈からの背景情報の付加によって表現される）が成立するのに対し、個人の意思では実行しにくい「忘れる、迷う」などでは祈願表現のみが成立する。それに対し、知覚動詞では、形式的には「聞く，見る」に（e）を加えることで可能の意味を表せる「聞こえる、見える」でさえ命令形としての使用ができないことは、人間の精神活動の普遍的なありかたが言語の用法に反映している証拠の一つとみなしてよいであろう。

2.2-2　中国語の方向補語構造

日本語動詞（命令形）が語彙の変化によって命令と祈願を表現しわけている、すなわち日本語動詞の意義素体系では「コントロール可」「コントロール不可」という語義的特徴が示差的機能を果たしているのに対し、中国語ではどのような言語形式を使って命令と祈願を表現し分けているであろうか？【表２】からわかるように、語彙の変化を用いるより、統合型の違いを用いるということは、統合型と統合型の間にも（意義素体系の中におけるように）弁別的機能と示差的機能を表す意義特徴が存在していると推測できよう。

【表２】現象動詞（コントロール不可能の経過を表す）の命令形が表す言語内行為
話し手＝S，聞き手＝H，モノ＝T，（　）＝予備条件，＜＞＝発語内目的

＜祈願の現象素（枠）＞認知焦点のチェーン	日本語表現	中国語表現
（X）S：T（変化開始）→→＜過程継続＞	（火よ）燃えろ燃えろ！	烧旺点儿！
	（凧よ）上がれ上がれ！	放高点儿！
	（雨よ）降れ降れ！	下大点儿！
（Y）S：T＜変化開始＞	（椰子の実よ）落ちろ！	掉下来！
（Z）S：H（変化開始）→＜断ち切り＞	忘れろ！	忘了吧！

【表２】では、動詞の語彙としての違いが用いられているのは（Y）「落とす：落ちる」にあたる“扔：掉，丢”だけである。前者は有意志の動作主が存在し後者には存在しない。

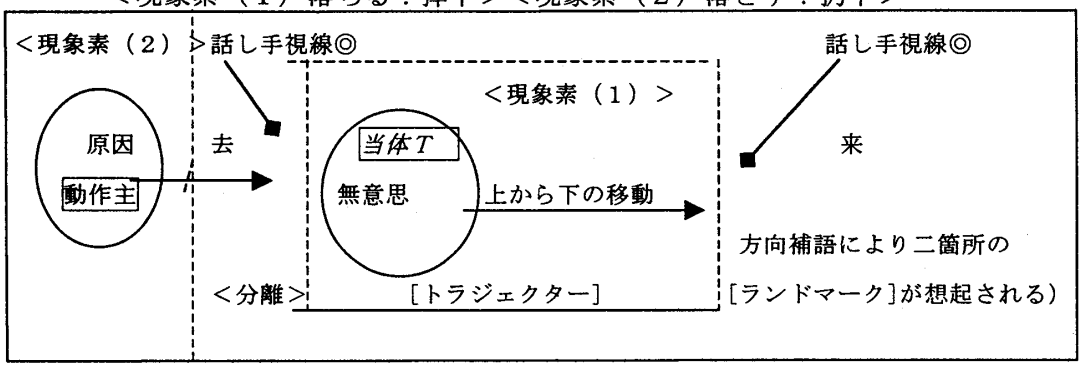
本稿では、命令表現の“扔下（去/来）”（＝去/来は付加しても付加しなくてもよい）と、祈願表現の“掉下去/来，丢下去/来”（＝去/来のどちらかは必ず付加する）[26]が慣習的に

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

想起させる現象素と現象素枠内を【図１】のごとくに描く。円形内は認知焦点を表し、命令表現では認知焦点は二つ、祈願表現では一つ存在する。動作主は事象を生じさせる原因の役割を、物体は「(状態・位置が変化する) 当体」の役割を担って認知の焦点になると捉える。後者のほうを祈願表現では際立ちの最も大きい認知焦点すなわち[トラジェクター]とする。

【図１】＜現象素枠＞他の現象素がズームインする場合の言語形式：主語成分*賓語成分*
＜現象素（１）落ちる：掉下＞＜現象素（２）落とす：扔下＞



この【図１】では、「コントロール可能」「コントロール不可能」を示差的意義特徴と現象素枠内の認知焦点に設定していない。(もし、設定するならば「有意思」「無意志」の区別の対比となる)【表１】と【表２】のそのほかの表現すなわち「分離・移動」以外のアクションチェーンを想起させる動詞語彙には変化がみられないからである。したがって、中国語の動詞における「コントロール可能不可能」という語義的意義特徴が動詞の示差的機能を果たすことが稀である(ほかのシソーラスでは機能する可能性が残っている)とともに、命令表現・祈願表現の区別における示差的語義特徴として機能していない、と考えられるからである。本稿では中国語の“扔”“丢”の間の示差的語義特徴は＜分離プロセスの有無＞と捉える。したがって、想起される現象素内現象素域では上から下へ空中移動する「当体」にとって移動前の「元のポジション」が存在するかしないか、の区別として描かれる。

「当体の元のポジション」を有意思であると規定する必要があれば、見方をかえた「コントロール可能不可能」を示差的特徴として捉えることもできる。しかし、ここにもう一つ、“丢下来/ 去”という中国語表現があり、その想起させる現象素枠は【図１】の全体、すなわち、命令表現“扔下（去/来)”と祈願表現“掉下去/来,”の双方の現象素枠をカバーできる。“丢下来/ 去”と“扔下（去/来)”との間に示差的特徴を見出そうとするとき、はじめて“扔下（去/来)”は「有意思」、“丢下来/ 去”は「無意志」と規定すればよいと考える。

本稿では示差的特徴の規定を、「二つの語彙の間で規定する」「必要最小限にとどめる」という原則に基づいておこなうことにする。

以上の考察を経て、本稿では（Y）命令表現“扔下（去/来)”と祈願表現“掉下去/来,”

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

の区別をつける示差的特徴を次のように判定する。

（1） 祈願表現の認知焦点は「原因を不問にした当体の位置移動、一つしかない」。
一方、命令表現の認知焦点は「動作主と当体の位置移動、二つある」。

（2） 祈願表現では方向補語“去／来”を必ず用いることによって、現象素枠内に「話し手の視点が二箇所のどちらか一方に固定したもの」として慣習的に想起される。その結果、認知焦点の背後に明確な背景が加わって事象描写表現となるとともに、「二つの位置のどちらかが、変化の始点または変化の終点のランドマークとして選択されなければならない」。
一方、命令しようとする場合には事象描写表現で代用することも可能だが、原則として話し手の視点を導入した現象素枠を通する認定は行わなくてもよい。

中国語命令表現では主語を表現しないことによって、話し手が訴える相手を聞き手へ限定するのに対し、祈願表現では方向補語＝話し手の視点を加えることによって、話し手から当体のありかたへの祈念を表現しているとも解釈できよう。

3.「中国語動詞の現象素」と日本語動詞の二つを融合させた現象素枠

次に、【表１（Ｚ）燃やせ】と【表２（Ｘ）燃えろ】が想起する現象素が、中国語ではともに“烧旺点儿”によって想起されるメカニズムについて考察する。本稿では、次の仮説をたて、かつ、その立証を試みる。

日本語の「燃やす」「燃える」の二つの動詞の意義素（示差的機能を果たす意義特徴が存在する）によって想起される二つの現象素は、中国語では“烧”という動詞一つの意義素が想起する①現象素内部構造における認知的多義（原則として「複数の認知焦点の設定」が原因）と、統合型操作による②現象素内への「ズームイン」[27]「ズームアウト」（焦点からはずし背景化する効果をあげる）のメカニズム、および③表現水準（事柄、出来事、事実、現実の４水準（注９参照））の指定を通して、双方ともに表現される。

立証のための手順を応用のきく一般的な手法として、つぎのようにたてる。

（1） 日本語動詞二つの意義素内の語義的特徴を意味的事項にわけて整理し、それぞれの弁別的意義特徴と、両者の間の示差的意義特徴を指摘する。

（2） 日本語動詞二つの意義素が想起する二つの現象素を重ね合わせて一つの現象素枠を構成したうえで、共通する情報（＝共通する語義的特徴から想起される）と、異なる情報（＝示差的特徴から想起される）、およびそれぞれの必要情報（＝弁別的特徴から想起される）とを指摘する。

（3） 中国語動詞一つの意義素が想起する現象素内の情報構造と、（2）で構成された二つの現象素からできた一つの現象素枠とを比較し、中国語ではその情報構造や認知焦点が一つの現象素スペースにどのようにおさまっているかを確認する。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

3.1 日本語「燃える」「燃やす」の意義素記述

燃焼という化学現象を表す語義を「多義の語義ネットワークの中心に位置する語義（「原義」）とする。まず、燃焼の定義として日本人の常識的な知識の範囲内で「燃焼とは物質が熱と光を発して酸素と化合する現象」（広辞苑 1998 第５版）とする。言葉の語義体系を考察するにあたって、専門的に突出した知識は日常の言葉の使用とかけ離れる場合があるからである。つぎに、この定義のなかから、及び言語形式の用法のなかから、意義素として記述すべき語義の意味的事項を設定し、【表３】に示す。両者の意義素を比較したうえで、【表３】のなかの語義的意義特徴から弁別的機能や示差的機能をはたすものを認定する。

【表３】★＝示差的語義特徴　☆＝弁別的語義特徴

意味的事項	燃える	燃やす
燃焼原因	無規定	有意思 and 生命体★☆[格（～が]
点火対象	無規定	火 or 発火物★☆　[格（～を]
燃焼当体	火 or 発火物　[格（～が]	火 or 発火物
燃焼の様態	発火・発光の継続☆	発火・発光の継続

弁別的意義特徴として、「燃える」では「発火物の燃焼継続」、「燃やす」では「点火して発火させる」（＝「燃やさない」「燃やすな」の否定の焦点）をとりあげる。

また、弁別的意義特徴の違いに伴い、＜言語形式で充足されるべき意味的事項（格）＞も異なってくる。その格を充足するのに用いられた言語形式（【表２】では名詞）の語義的意味特徴は、動詞「燃える」「燃やす」の現象素内に、あらたな情報をズームインさせる役割を果たす（既出の仮定）。ここでは、あらたに、その情報が想起される順序、認知焦点としての際立ちのレベル差、などは用いられる統合型によって決定づけられる、という認知言語学での所見を、このズームインの方式として適用できることを指摘しておきたい。[28]

なお、意味的事項の記述で＜語義特徴が無規定＞[29]であるということは、何の現象素内情報も想起しない、ということである。現象素内の情報としていかなる意味でも認知焦点とはならないため、現象として無視していることと同義である。

3.2 日本語「燃える」「燃やす」の現象素記述

次に、【表３】の「燃える」「燃やす」の意義素が想起させる現象素を、【図２】のなかの（１）と（２）として記す。また、「燃える」と「燃やす」が統合型内で用いられた場合、＜現象素（１）燃える＞と＜現象素（２）燃やす＞のなかに、どのような情報構造が加わるかを検討する。

「燃える」の最小統合型（単層）＝＜当体＞＋が＋燃える

「燃やす」の最小統合型（二層）＝＜点火者＞＋が＋＜受け手＞＋を＋燃やす

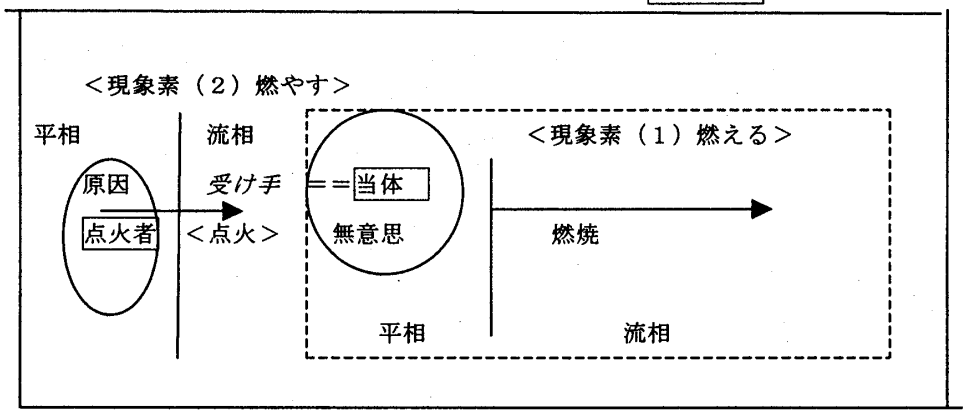
この二層の最小統合型において、通常の場面文脈ではフィルモアの顕現性の階層論（注27 参照）のとおりに、主語成分として「点火者」が当体兼受け手である「燃やされるもの」

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

より優先して選ばれる。すなわち統合型操作によって動詞と名詞が組み合わさった「統合意義」が想起する現象素枠には、少なくとも二つの認知焦点のあいだに「際立ちの優劣に関する情報」が加わる。

【図２】他の現象素がズームインする場合の言語形式：主語成分*賓語成分*

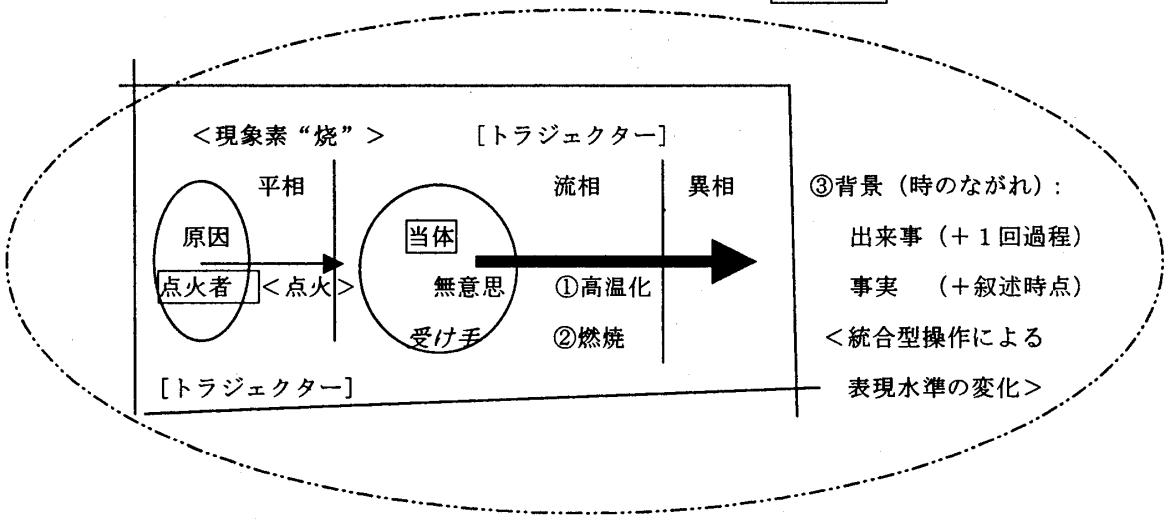


3.3　中国語の現象素“烧”の場合

“烧”の現象素は日本語「燃える」「燃やす」の二つの動詞の現象素をつなげた【図２】から、両者の情報構造の示差的機能をはたす境界線を取り払ったものになる。そのかわり弁別的機能を果たす情報として①②（語義的意義特徴）③（文法的意義特徴）が加わる。

【図３】は、“烧”が認知焦点を二つ含み、最小統合型が重層（「燃やす型」）であることを表示している。“烧”がどちらの認知焦点をトラジェクターと指定するかは統合型操作によって定まる。認知焦点・動作主がトラジェクターとされる場合、すなわち動作主が主語に選択される場合、統合型は通常のＳＶＯ型である。認知焦点・当体が主語にトラジェクターに選択される場合、統合型はＳＶ型になる。

【図３】他の現象素がズームインする場合の統合形式：主語成分*賓語成分*



NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

しかし、「燃やす」が受身構文「＜当体＞が（＜動作主＞ni）＋～sareru」という統合型操作を用いて、その名詞句の顕現性の階層（フィルモア 1977：注 27 参照）を逆転させることを表現するのに対して、“焼”ではもっともシンプルな統合型操作としては「動態の付加」を用いて＜表現水準の上昇＞、この場合は事柄から事実へ（注 6 参照）上昇するよう書き換える、という表現方法を用いる。この本稿が提案する＜表現水準の上昇＞いう観点を含めて、“焼”を「燃やす」「燃える」の意味として用いる場合に、その統合型操作がどのように異なるかを、項をあらためて検討する。

4. 中国語動詞“焼”の主語と目的語に関わる認知焦点の優劣

4.1 中国語動詞“焼”の多義構造

中国語動詞と名詞の組み合わせを格の視点から整理した編集方針で知られる『動詞用法詞典』（上海辞書出版社）では、Oの位置に置かれる名詞を“受事（受け手）”“結果”“工具（道具）”“処所（場所）”と分ける。形式上の判定根拠は“結果”では動詞のあとに補語“成”を付け加えられること、その他は「個別の前置詞“把”“用”“在／从”をつけて動詞に前置できること」とされている[30]。以下、引用する。

() 内＝日本語訳：／＝本稿での補充用例：●＝身体部位：波線＝インフォーマントチェックをかけた結果、変更を加えた表現：＊＝標準語では使わない

『（1）加热；东西着火；化学药品等腐触。[名宾]烧火。

[名宾类][受事]≈水（湯をわかす／烧开水（沸騰させる）／烧洗澡水（風呂をわかす）／烧洗脚水）≈纸（紙を燃やす：ノーマークの文脈では、宗教儀礼で紙幣に擬される紙），≈房子（ノーマークの文脈では放火で家を焼く），≈香（香をたく），●烧碱（或）洗衣粉≈手（触れた薬品で自分の手を荒らす），

[结果]≈砖（レンガを焼く），＊≈灰（／烧成灰（灰にする・灰になる）），≈炭，≈饭（＝做饭（主食も惣菜も含む）／煮饭／炒饭／）

≈了一个窟窿（焦がして穴があく／＊“烧窟窿”；“了”or 数量詞が必要）

[工具]≈木头（／≈柴火／≈劈柴），≈煤，≈柴油（ディーゼル），（＊“用木头烧”“用木头烧火 or 烧开”；“烧”のあとに虚目的語 or 補語が必要）

[处所]≈炉子，≈窑

『動詞用法詞典』ではこの他に（2）調理方法；まず油であげてから汁を加えて炒めたり蒸したりする、またはその逆の手順で調理する。（3）病気で発熱する。（4）肥料のやりすぎで植物を萎れさせたり枯らせたりする。という用法を別項目にたてている。（1）をわざわざ別項にたてるのは、中国語では料理をつくる場面に用いられる動作を細かく指定する特殊な語彙群があり、料理方法はフィルモアの提案した「動作行為のフレーム」[31]の一つとして質量ともに十分な表現をまとめて整理できるので、別項をたてるのは容認できる処置である。

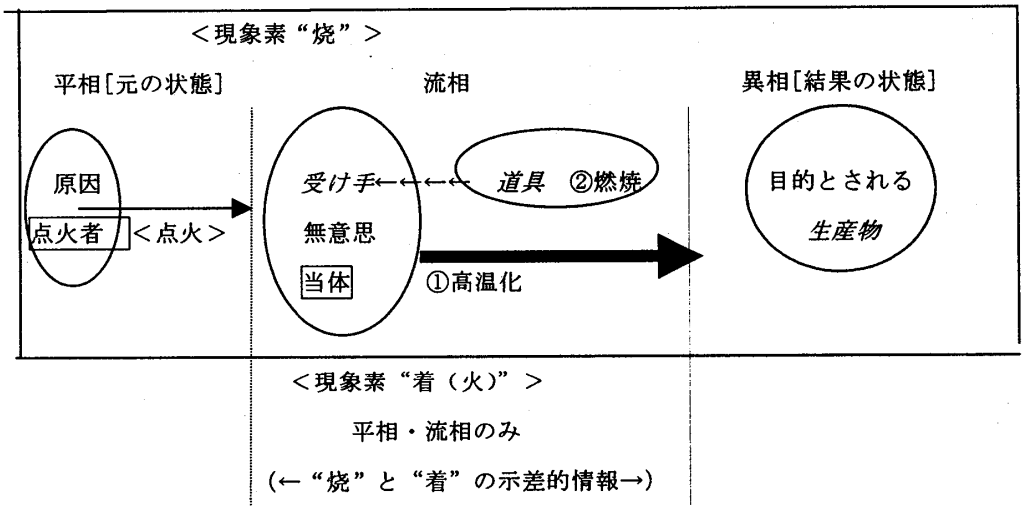
NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

本稿では、語彙項目（1）加熱に挙げられた[受事]のみを、日本語「燃やす」「燃える」が想起する現象素枠に関わる認知焦点として扱い、【図3】もその方針で描いてある。すなわち「受け手」（目的語位置）「当体」（主語位置）のどちらか一方の情報として考察する。

ただし、中国語動詞のアクションツァルトがどのような現象素を想起させ得るかは、表現水準の差異を設定する必要性を主張する根拠の一つでもあるので【図4】として“烧”が想起する現象素情報構造の概略（注29参照）を示しておく。

【図4】



4.2　異相に存在する認知焦点—典型と非典型

中国語は日本語が「テニオハ」で表現しわける認知焦点（優劣の差まで区別しうる）を、目的語の位置一つに置いてしまう。したがって、それぞれの認知焦点の優劣を逆転、すなわち認知焦点でなかった情報が認知焦点の地位を獲得するにしろ、主語としての顕現順位で下位の層にある認知焦点が主語の位置を獲得するにしろ、さまざまな統合的操作を必要とする。

『動詞用法詞典』の用例をとりあげるならば、[結果]の語彙項目の“≈了一个窟窿”は、目的とされない生産物が、統合型操作によって目的語の位置を獲得する、すなわち現象素枠内で認知焦点の一つに格あげされる過程である。

【認知焦点をつくり出す統合型操作例】烧了一个窟窿（焦がして穴があく）

＊烧窟窿（単独目的語に“窟窿”は使われない＝現象素内認知焦点ではない。情報として目的とされる生産物を表してはいないためである。）

（1）＜動態助詞“了”の付加＞

烧了窟窿＜アクションツァルト過程が1回展開する＞→出来事化：表現水準を上昇させる

マーク付き文脈：仮定　　烧了窟窿的话，我帮助你补。（もし焦がしたら、繕うのを手伝ってあげます）

文の言い切る述語として使えないのは、表現水準（注9参照）が出来事にとどま

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

り、叙述時点（発話場面に依拠して発話時点を重ねることもできる）さえ含義していないためである。

（2）＜数量詞“一个”の付加＞

烧一个窟窿＜「意識的に焦がす」ことを表現する＞→事実化：表現水準を上昇させる。しかし、不利益なことを行おうとする特殊な意志が成立しただけであり、発話時点では未発の事象である；＊烧这个窟窿＞

マーク付き文脈：議論や提案　料子不透气，你可以烧几个窟窿。（材質が通気が悪いから、いくつか穴を（焼いて）あけたらどうですか）

では、このように統合型操作を通して（目的語位置の）認知焦点へと変化させられたモノは、さらなる統合型操作によって同一現象素内で（主語の位置におかれる）最上層の認知焦点になるであろうか？少なくとも“窟窿”は“烧”の現象素内で最上層の認知焦点にはなりえず（＊“窟窿烧（了/好了/成了…）”）この点で、本来生産物として認知焦点になりえたモノすなわちレンガや炭（砖烧了／炭烧了）とは統合型操作の受け方を異にしていることがわかる。

4.3　認知焦点の顕現順位（主語と目的語位置）を逆転させる統合型操作

さて、このように、中国語“烧”は、日本語の「燃やす」「燃える」の現象素現象素域を超えた、異相（典型）までを含んだ現象素を想起させる。現象素枠の定義に基づけば、この想起機能が、「異相の状態を想起させる性質形容詞の情報」が、「結果補語構造（【表１】“烧旺（一点）”）操作を通して異相にズームイン」することを可能にしていると容易に予測がつく。そこで、次に考察すべきは、異相の認知焦点（生産物）や流相の認知焦点（受け手・当体・道具など）を主語の位置に置くということが、フィルモアが夙に指摘している格の顕現順位（注 27 参照）を「逆転させる統合型操作」に他ならないという点である。こういう機能は個々の統合型の統合意義特徴（弁別的特徴）に帰属させることができず、主述統合型と述語目的語統合型の間での「認知焦点の定め方に関する示差的特徴」としてのみ記述できると予想される。

『動詞用法詞典』をはじめとし、中国で作成された中国語母語話者の語感を前提とした辞書類では、前項の引用箇所のごとく目的語との統合について語義や典型的用例が詳しく記述されるが、一般に主語になにが置かれるかについては記述されない。主語には「動作主」を置きさえすればよいので辞書に記述する必要はない、という語感は英語のような構文上の主語が必須条件である言語のみならず、日本語中国語でも蔓延しているといえる。

しかし、中国語では日本語よりも主語の位置にどの語彙群（認知焦点を想起させる名詞群）を置くかという情報は統合型操作に深く関わる情報であり、述語となる語彙項目で一定数の規則にしたがって記述し分ける必要があると筆者は考える。なぜならば、語彙ごとに、すなわち意義素内の意味的事項の語義的特徴として記述しておかないのならば、【表４】

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

のような統合型操作の制限が解釈しきれないからである。以下、中国語“烧”の用例で目的語位置の名詞が主語の位置へ移動する、認知焦点としての優劣逆転を行うための統合型操作を「燃やす」「燃える」相当の現象素（【図３】）に限定して示す。【表４】左欄の用例は小学館『中日辞典』『日中辞典』の記述（@を付す）から抜書きし、右欄の、左欄の名詞と動詞の位置を入れ替えた用例はインフォーマントチェックをかけた作例である。

【表４】認知焦点の優劣逆転

主語：＜点火者＞目的語：受け手→→→	主語：当体　　ＵＰ
@　火を燃やす	＜当体＋が＞燃える
烧火	＜　＞着火
@　点火する	＜当体＋が＞点火する
＊燃起火来　→点起火来	＜火＞烧起来 / 着起来
@　落ち葉を燃やす	落ち葉が無くなる　　（消失）
烧落叶	落叶（都）烧了
石炭を燃やす；暖炉を燃やす	石炭が無くなる；暖炉の火が燃えている
@　烧煤　　；把炉子着起来＊烧起来→	煤（都）烧了　；炉子着好了
柴をたく	柴が無くなる（使い切る）
@　烧柴	柴烧了
ガスを燃やす	ガスが無くなる（使い切る）
@　烧煤气	煤气烧了
湯を沸かす	湯がわく　　（目的の温度に達する）
@　烧水	水烧了
主語：当体　　→→→	主語：＜点火者＞目的語：受け手ＤＯＷＮ
@　火が盛んに燃えている	＜点火者＋が＞火を盛んに燃やしている
火着得 or 烧得很旺	＜　＞把火烧得（＊着得）很旺
这煤湿，不好烧（＝不好着（火）OR 火着了、可是烧得不太好）	
@　森林が４，５日燃え続けた	森林を燃やした
那片森林一连烧了四五天	＜大火＞烧了森林；＜没良心的人＞烧森林
手紙はもう焼いてしまった	手紙を燃やした（受け手として認知焦点）
@　信已经烧了	＊烧信　→→烧了几封信／把信烧了

「当体」は流相における認知焦点第一候補であるが、平相の「動作主」に比べれば顕現順位が低い。また、必ず平相に動作主が存在することを前提とする「受け手」と比べれば、「当体」は顕現順位が高いと予測できる。したがって【表４】において、「受け手」から「当

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

体」への転換は順位上昇（UP)、「当体」から「受け手」への転換は順位下降（DOWN）の統合型操作といえる。本稿では前者を上昇統合操作と呼び、後者を下降統合操作と名づけておく。言語形式としてあらわれる顕現順位が高いということは認知焦点としての優劣でも上位にあるということであり、言語形式化されにくいということは認知焦点としても重要視されていないということと平行しているという原則に従うならば、上昇統合操作と下降統合操作では（１）動詞の前後位置を変換する、ほかに（２）異なった言語形式の用い方をすることが予測できる。前項でふれてきたごとく、中国語では目的語位置にたつ名詞の想起させる認知焦点が、あまりに多岐にわたっているため、前後位置の交換だけではその意味的差異を処理しきれないからである。本稿では“烧了一个窟窿”（上昇）と【表４】の語義的文法的分析を通して、上昇統合操作と下降統合操作とにつぎのパターンがあることを指摘する。

【上昇統合操作】動態助詞の付加により、表現水準を事柄から出来事へ引き上げる。

【下降統合操作】前置詞“把”の付加により、述語動詞の現象素内平相[32]が事象の原因として存在することを示す。

例えば、【表４】

火着得 or 烧得很旺　→→→	＜　＞把火烧得（＊着得）很旺　DOWN	

動作主の存在と“着得”とは共起制限を引き起こすことは、(図４）に示したごとく、“着火”の現象素の現象素域には原因や動作主が含まれないためと説明できる。中国語においても、日本語の「燃える」のように意味的事項として動作主をもたない語彙が存在することがわかる。フレーム文法や認知言語学で常に動作主が言語形式化される最優先順位におかれると仮定されたことがあるが、世界の自然言語のなかで動作主そのものを意義素の意味的事項に含まない動詞があることは、見過ごされてはならないことである。

5. おわりに

形容詞の現象素を動詞の現象素へズームインする統合型操作、現象素連結操作、という観点から文法構造を解析することを意図して稿を起こしたが予定の紙幅が尽きてしまった。

本稿が依拠した旧来の手法には次の難点がある。

（１）意義素は基本的に語彙の多義構造と格（意味的事項）充足の情報をしるすのに有効な概念であるが、文法独自の機能や統合型操作は単語ごとの分析では記述しがたい。

（２）現象素は意義素論が文法解析に無力であることを補い、語義的意義特徴を情報として組み込める概念であるが、その分析機能が及ぶところは、時空をその背景に設定したとしても単文（複文を含む）までである。文脈的意味、テキストの解析、テキスト内の論理的関係を記述するには記述容量が不足している。

本稿では（１）（２）の弱点を補強すべく、「表現水準」という概念を提案し、＜現象素が文よりも大きな表現単位テキストの要素として果たす機能＞を記述する方法を模索して

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

いる。本稿はつぎの目次を有する論考へ引き継がれる予定である。

1．はじめに
2．日本語形容詞の命令形が想起する現象素について
2.1　日本語形容詞連用形プラス「しろ」
2.2　中国語のⅠ結果補語構造とⅢ連用修飾構造
3．意図と目的（流相と異相への思考情報）について
3.1　日本語・形状形容詞連用形プラス動作動詞命令形
3.2　中国語・形状形容詞の命令表現
4．表現水準と「時空」（現象素背景）について
4.1　日本語・時空形容詞連用形プラス動作動詞命令形
4.2　中国語・時空形容詞の命令表現
5．おわりに

注

1 筆者は以下の著述でⅠⅡⅢの文法構造に動詞と形容詞の同一の組み合わせが、挿入できるかどうかを比較し、その文法的意義特徴を検討した。インフォーマント調査（3～4名）を丁寧に繰り返したが、今後大量コーパスを使用して、その結論に対する統計的再確認作業を行う予定である。
1995『述語補語統合型の統合意義特徴―　動詞と形容詞との組み合わせを対象として』
東京大学東洋文化研究所紀要第128冊
1996a『状語中心語統合型の統合意義特徴』　東京大学東洋文化研究所紀要第129冊
1996b『判断形容詞と動詞とが組み合わさった統合型の統合意義特徴の分析』
東京大学東洋文化研究所紀要第131冊

2 性質形容詞と状態形容詞の区別は、朱徳熙1956「現代中国語形容詞研究」『語言研究第一期』に依拠する。

3 柴田武1988「語彙研究と方言語彙」『語彙論の方法』三省堂
「語彙」という術語を、「語義的側面からとりあげられた個々の単語」という意味で用いる。
『実際には「語」の意味で「語彙」を用いることが少なくない。たとえば「平良方言のムミウツという語彙は、人によって“みぞおち”のことである」のように用いるのは、決してまれなことではない。そこで、本論では、体系であることを強調したり確信する場合には「語彙体系」ということにする』　(P117)

4 大滝幸子1999『中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その一）』
東京大学東洋文化研究所紀要第138冊pp188-194
2001『中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その2）』
東京大学東洋文化研究所紀要第141冊pp132-140

5 計量形容詞の定義は「当該形容詞のあとに数値表現をつけて増減を表すことができる」という、陸倹明の次の論文に従う。
陸倹明1989 说量度形容词《语言教学与研究第3期》

6 筆者による「動作・行為に関する表現水準」の定義は以下のとおり。（大滝1996bより）
事柄＝動詞意義素内のアクションツァルト（平相・流相・異相）・時空制限を超越。
典型VA（助詞（了）をつけずに名詞と統合）・離合詞・虚目的語構造など、形式が限定。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

出来事＝アクションツァルト内の過程が１回は最後まで到達（動詞の要求する第一次格が充填ずみ・助詞（了・着）がつく）したものとして表現する。時空は不特定の背景としてのみ存在。

事実＝出来事が特定の時空（叙述時点・叙述場面）で実現したものとして表現する。（叙述時点を発話時点と比較して決定される時制は不特定、すなわち発話時点が発話行為の行われる現実とともに背景に含まれることがない。）主題（theme）に対する題述（rheme）を行うという点で、表現水準を事実まで引き上げる。

現実＝発話時点で認知できる現実と相互比較して表現する。（時制も指定される。自然言語としての「伝達情報に関する真偽」も判定できる。）聞き手への伝達機能を発話時点で完了させる言語形式（文）の表現水準が現実である。

7 R.W.Lanwgar. 1987 *Foundation of Cognitive Grammar(Vol1)*. Stanford Univ.Press　p144
本稿での表現水準「事柄」は、ラネカーの「総括的走査 summary scanning」,「出来事」は「順次的走査 sequaential scanning を１回完了すること」に相当し、走査対象はアクションツァルト（動作意義素内の意義特徴間の部構造）である。前者では意義特徴間の構成が順をおったものとはみなされない。

8 原由紀子 1989「程度副詞“很”と状語の関係について」『姫路独協大学外国語学部紀要２号』
否定副詞を連用修飾語に前置した場合、「動作そのものの実現も否定されること」を指摘している。また、進行を表す副詞“在”は形容詞重畳形からなる連用修飾語とは共起できるが、“很”と状語からなる連用修飾語とは共起できない。

9 感覚感情形容詞群の場合は動詞との統合可能性を強から弱へ並べると、Ⅲ→Ⅱ→Ⅰ、となる。また、形容詞を用いた命令形表現ではⅢ型の使用頻度がもっとも高くなる。

10 服部四郎が提議した抽象段階はつぎのような内容であった。以下、抜書きする。

（１）1949 年雑誌『ことば』に掲載した論文「具体的言語単位と抽象的言語単位」
「発話」などの具体的言語単位と「文」などの第一次抽象的言語単位、および「形式、単語」などの第二次抽象的言語単位を区別する。

（２）1953 年「意味に関する一考察」『言語研究』日本言語学会
発話の具体的な「意味」と区別して、文の「意義」、単語の「意義素」と呼ぶことにする。

（３）1968 年「意味の分析」『英語基礎語彙の研究』三省堂
「発話」（utterance）とは話しをするという出来事（speech-event）の単位である。それは、発話者が話し始めるときに始まり、彼がその行動を終わって沈黙するか、あるいは話すこと意外の行動に移るときに終わる。

日本語の発話、たとえば、いろいろの話し手の発する『この本、あなたの？』という発話は、いずれも互いに異なる。しかし、それらは、同じ日本語言語共同体のすべての話し手によって要点は同じだと認められるから、ある共通の特徴をもっているものと想定される。このような場合に、これらの発話は、「コノ　ホン　アナタ・ノ？」という同じ「言語作品」（linguistic prodaction）に該当（correspond）する、と言う。

言語作品は一つ、あるいはそれ以上の「文」（sentence）より成る。文はその末尾を示す音調（intonation）を持っており、文に該当する発話または発話断片は音休止（pose）によってその前後を限られるのが常である。

統合型とは、一つの文のシンタクス的構成（syntactic　constuction）のことである。一単語から成る文の場合でも、一つの成分だけからなる統合型を想定すべきである。

したがって、一つの文の意義は、音調の意義と、統合型の意義と、含まれている諸単語の意義素とから成り、それに文脈的意義がしばしば加わる。もし強調の型（emphasisi-patten）を文の要素とみるならば、強調の意義もこの中に加えなければならない。

（４）1968 年「意味」『岩波講座哲学 11 言語』
発話は一回きりの出来事であり、「個人的実質」である。その音声はオトと証する外界での出来事であって、誰にでも観察できる。そういう個人的実質において、言語作品をなすところの諸特徴が認められる、と想定するのである。

文法の観点からすると、文はそれだけでまとまっていて独立であり、その言語作品の他の部分、その文を除いた残部（があればその）の全部または一部に文法的に含まれること

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

がない。(意味の面から見ると、「文は完結しており、その表現者は文の途中では背後にあるけれども末尾では必ず前面に出て来て、その文全体の意義を保障する」)

(5) 1974年「意義素論における諸問題」『言語の科学5号』東京言語研究所

発話の音声という個人的実質において、「繰り返し現れる社会的特徴」とその他の特徴とを区別することができる。前者は、de Saussyre が langue と読んだものの反映である。後者には、その場限りの (causual) 個人的特徴、繰り返し現れる個人的習慣、個人の体質および気質に起因する特徴、感情や意欲の直接的反映である特徴、などが含まれる。これらすべての特徴が、一つの発話の音声において観察されるので、私は、一つの発話の意味 (すなわち心理的言語表出活動の意味的側面) にもそれに対応する諸特徴が見出されるものと、想定する。

従って、理解活動 (発話を聞いてその音声を認知し、その意味を理解するに到る活動) にも同様な諸特徴が見出されるものと、想定する。そして、それらの諸特徴はすべて、発話者および理解者の人間としての能力の上に立っている。

11 萩原裕子 1998『脳にいどむ言語学』岩波科学ライブラリー59

12 斉藤勇監修 1996『認知心理学重要研究集2:記憶認知』誠信書房

13 J.L.Austin. 1955 *How to do things with words.* Harvard university press Oxford University Press
坂本百大訳『言語と行為』大修館書店 1978

J.R.Searle. 1969 *Speech Act、an Essay in Philosophy of Language* Cambridge Uni.Press
坂本百大・土屋俊訳『言語行為』勁草書房 1986

Daniel Vanderveken 1990 *Meaning and Speech Act* Vol1. Cambridge Univ.Press
久保進監訳『意味と発話行為』ひつじ書房 1997

14 田中茂範 1990『認知意味論ー英語動詞の多義の構造』三友社

15 大滝幸子 1996a (注1既出)

16 筆者は服部の提案した人格者の3種の名称と表現水準の4段階を次のように対応させる。
服部四郎 1957「ソシュールの langue と言語過程説」『言語研究』32号日本言語学会

『色々な発話者の発話が同一の文に該当する場合に、発話者とは独立の「文の表現者」というものを仮定することができる。文の表現者は発話者と一致するのが普通だが、これから分離することもある。嘘をつく場合、皮肉をいう場合などがそれで、後に詳しく説く。

「シンヨーノオケルヒトダ、トイウコトダ」

という文では、この文の表現者と、「‥‥ヒトダ」という引用句の表す判断の主とは一致しない。この判断の主を「第一人称者」と呼ぼう。』

不定人称者=「事柄」を認定する能力・視点を有する。個々の発話行動ではなく、個々の言語形式 (単語またはフレーズから成る語義的単位) に固有の社会的人格。
(大瀧による命名)

第一人称者=文以前の重層統合型が構成する「出来事」を認定する能力・視点を有する。

表現者=文単位の重層統合型が構成する「事実」を認定する能力・視点を有する。

話し手=文連結の文統合が構成する現実を認定する能力とともに、発語内行為の遂行能力を有する。

このように、認知能力における段階分けをすることは理論構成を複雑化させるだけでなく、無用な重複を招くと予想されがちである。しかし、例えば自己の感情を表現しようとする場合に、構文としての言語形式を選択する能力と、感情形容詞を選択する能力とは別次元 (前者は表現者に所属し、後者は不定人称者に属する) だと考えられる。理論的根拠には記憶の形態に関する脳科学の所見 (失語症研究など)、幼児の言語習得経緯の研究などが挙げられる。筆者は、言語研究の分野においても、それぞれの段階ごとに一貫した言語表現構成のシステムを仮定するとともに、つぎの段階への飛躍と推移を促す要因を探求する研究方法を試みようとするものである。

17 国広哲弥 1981『意味論の方法』大修館書店 pp25-31:

18 E.A.Nida. 1975 *Component Analysis of Meaning.*

19 J.L.Austin. 1955 (注7既出) p103 (翻訳本) pp177-178

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

『われわれは三種類の行為を概略区別した。すなわち、発語行為、発語内行為、発語媒介的行為である。』『今、ここで、言語の「使用」という言い方をすることによっても、同様に発語内行為と発語媒介的行為との間の区別が不明確なものとされることを知るのである。‥‥大雑把に比較するならば、前者は慣習的（conventional）である。その意味はこれらが少なくとも、遂行的表現形式を用いることによって顕在化が可能であるということである。これに対して、後者はその顕在化が不可能である。』

オースティンの「慣習的」という概念はのちに多くの議論を呼んでいるが、本稿では「日本語において、命令形という活用形式によって＜命令＞という発語内行為が顕在化（表現）されること」を根拠として、命令行為という伝達機能を成り立たせている諸要素のうち、個々の言語形式が想起する現象素枠内で弁別的機能をはたす情報を「慣習的意味」とみなすことにする。

20　この表の 認知焦点の記述は「イヴェントスキーマー」の記述が拠ってたつ観点と似て非なるものといえる。命令行為はいまだ発現されていない発話内目的に基づくものであること、また話し手と場面のセッテイングと関わるためである。また、符号→　は言語形式の意味が「聞き手に対して慣習的に定まった了解を要求できる範囲」を示すものであり、「アクションチェーン」が示すエネルギーの伝達表示と見た目はそっくりであるが、これも管見の限りでは、内容をことにするものである。

21　動詞が表すアクションツァルト（出来事の構造）を、本稿では次のように定義しておく。ここでの用語の定義は拙稿 1990『中国語離合詞が提起する文法問題（その１）』明海大学外国語学部論集第３集のものを用いる。

平相 （変化開始前の第１状態）	スタート	流相 （動作継続・過程継続）	ゴール （変化終了）	異相 （付着・第２状態持続）

（１）「瞬間動詞」が表す出来事では、スタートとゴールの事点が重なる。

（２）「継続動詞」が表す出来事のうち、ゴールが語義特徴として設定されている動詞を「有限動詞」，ゴールが動詞の意義素のなかに含まれるのではなく、話し手が選択した別の形式によって区切られる動詞を「無限動詞」と呼ぶ。

（例：無限動詞「歩く」は、「三時間」「〇〇まで」などの表現でゴールが区切られる）

22　中国語関係の虚目的語に関する議論にはつぎのようなものがある。

町田茂 1991「「動詞－賓語－動詞－結果補語」式の文法的意味」『中国語学 238』中国語学会

1992「「動詞－賓語－動詞＋得－程度補語」式の文法的意味『中国語学 239』中国語学会

大瀧幸子 2001（注４既出）

23　アクションチェーンの視点にたてば、「自発的」「他発的」に対しての「絶対的解釈」に相当する。すなわち、変化の原因が存在してもそれを現象素域の外においてエネルギーの関与を廃し、自立的な変化として捉える。本稿では動詞表現が「現象素内でエネルギー源を慣習的に想起しない」とする。

R.W.Langacker.1990*Concept,Image,and Symbol:TheCognitive asisofGrammar* MoutondeGruyter

24　寺村秀夫 1982『日本語のシンタックスと意味Ｉ』くろしお出版　第３章・態

日本語の文法的態として「受動態」「可能態」「自発態」「使役態」を区別し、「語彙的態」として自動詞他動詞の対立をあげている。本稿でいうところの「自律」と寺村の定義する自発とは異なり、自動詞の意義素内にコントロール不可能という語義的特徴が含まれていることを指す。しかし、語彙群の成員は寺村の挙げる自発態と同様であり、「他動詞から派生した自発形（末尾の･e･（ru）と取り去ると、（もとの）動詞の語幹が現れる」という形態的特徴を有する。(p280) こと、意味的には可能態も表現しうる形式と認めることも同様である。

自律（寺村 1982 は「自発」とする）を表現する語彙群は、「切る」「焼く」「割る」に対する「切れる」「焼ける」「割れる」などである。

25　寺村秀夫 1982（注 22 既出）第３章・５動詞の自他－語彙的態の類型

１０種類の形式上の対応関係を列記してある。

26　筆者の依頼したインフォーマントの語感に基づく。筆者は、辞典や文学作品、コーパスなど出典の違いに関わらず、収集した用例を必ずインフォーマントチェックを加えてから考察

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

対象としてきた。語感や典型非典型の判断が「内省に基づく個人的判断」である以上、統計的処理を加えるにしろ、個人言語に絞るにしろ、出所を明らかにし、場合によっては再検討や類似表現と比較した考察ができるようにしておかねばならない。

朱瑞平（男）1962年生：江蘇省如皋市生まれ：18歳より北京在住：北京師範大学助教授

[27] 主述構造、述語目的語構造の場合は、そこにおかれる認知焦点に対して「際立ちの順序を指定する操作」を加える。それに対して、修飾構造の場合は他の「現象素を埋め込む操作」を加える。

[28] 認知焦点の優劣について、フィルモアの二つの見解を参考にした。

（1） C.J.Fillmore ,D.T.Langendoen(eds) 1971. *Verbs of judging: An exercise in semantic description* pp272-89

「格階層理論」主語として選択される優先順位を提案。

動作主格＞経験者格＞具格＞対象格＞源泉格＞目標格＞場所格＞時間格

本稿では、格（＝言語形式化することを要求されている意味的事項）が主語として優先される順位づけは文法構造によって変化するものと解釈し、これらの格階層順位を意義素内の意味的事項の認知焦点としての優劣とは認めない。

（2） C.J.Fillmore.1977.*Topics in lexical semantics* P. Cole(ed) pp76-138

「視点」概念の導入と、文の中核領域（名詞＋動詞＋名詞＋名詞）と周辺領域（前置詞句）との区別に基づき、名詞句の顕現性階層（＝主語の位置あるいは中核領域において）を提案。

（1）能動的＞非能動的　（2）起因的＞非起因的　（3）人間性＞その他

（4）変化を受ける＞受けない　（5）完結的＞非完結的

本稿の立場では、「言語形式化のされ方が認知焦点としての際立ちを左右する」という原則に基づき、今後、この5項目の普遍性を検討していく予定である。

[29] 服部四郎 1968「意味」『岩波講座哲学 11 言語』

語義特徴相互の関係として「中和」と「だきあわせ」の用語を提案している。本稿では「中和」を「複数の特徴のうち、どれかが場面文脈によって指定されるが、一般的に特定された特徴はない。」という関係を表すものとして用いる。これは服部の提案どおりで、意味的事項として無視するのとは異なる、とする。一方、「だきあわせ」は、本稿の立場にたてば意味的事項ごとに複数の語義的意義特徴を必ず記述する以上、どの意義特徴とどの意義特徴が組み合わさっているかを表記するのは、異議素記述の原則であり、当然のこととして特に用語として用いることをしない。

[30]認知焦点という観点から、格の概念を捉えなおすと次のようになる。

「結果＝生産物」行為が行われてはじめて存在するようになった生産物。典型は動作終了後異相に出現するものである。

「場所」現象素内で火（焦点ではあるが言語形式化されていない）の生じている地点をランドマークとして認知焦点にとりあげる。

「道具」平相から存在し、流相で用いられる。典型は道具自体に変化が生じないものであるが、“焼”では道具そのものも燃焼し変質する「第二の受け手」でもある。

[31] C.J.Fillmore.1982. Frame Semantics *Linguistics in the Morning Calm* Hanshin pp111-38

ここでは類義語の語彙群を定めるときの基準として「フレーム」を用いる。本稿の立場では、フィルモアが提出したフレームにも＜表現水準の区別＞を反映させ、語彙群を認めるのは事柄水準となる。

[32] 大瀧幸子 2001（注4既出）では、前置詞“把”が三種の文法構造とともに用いられた場合と、用いられていない場合とを比較し、その統合意義特徴を分析した。さまざまな用例において共通して使われる、出現頻度の高い意味は「処置を加える」よりも「出来事発生以前に、その発生原因が存在している」という因果関係を想起させる意味である。

NII-Electronic Library Service